九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鹿子生浩輝著『征服と自由 : マキァヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』

鎌田, 厚志
九州大学大学院法学研究院 : 協力研究員

https://doi.org/10.15017/1515704

出版情報：政治研究. 61, pp.57-59, 2014-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

紹　介

鹿子生浩輝著

『征服と自由――マキァヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ――』

（風行社、二〇一三年、四九二頁）

近代政治思想の出発点とも言われ知らぬ者なき存在でありながら、「誤解の歴史」に覆われてきたマキァヴェッリ。本書はその「歴史的実像」に迫る研究書である。該博な歴史的知識を駆使し、歴史的コンテクストを明らかにすることによって、マキァヴェッリ自身の実践的意図を解明し、「フィレンツェ共和国の自由を追求した理論家」（一八―一九頁）としてのマキァヴェッリ像を提起し、今まで十分に明らかにされてこなかったマキァヴェッリの二大著作である『君主論』と『リウィウス論』の整合性に本書は新たな光を当てている。

従来、マキァヴェッリは、権謀術数の思想家としての通俗的なイメージや、「専制君主の助言者」あるいは「共和制の擁護者」という二つの大きく分裂した伝統的解釈によって語られてきた。近代以降は「国民国家の予見者」や価値中立的な「近代科学の祖」としても解釈された。さらに、一九七〇年代以降は、実力支配としての「スタート」概念を中心にした研究や、「君主の鑑」や「共和主義」といった思想的伝統との関連において研究がなされてきた。これらの先行研究を整理した上で、本書は、従来の研究はマキァヴェッリの政治思想を主にテクストから解明しようとするものだったと指摘する。その結果として、『君主論』と『リウィウス論』の両著作の整合性は未だに解明されていないという問題を提起する。

この問題に対し、本書は、テクスト理解のために歴史的コンテクストを把握すること、つまりマキァヴェッリの生きた時代背景を理解することによりその実践的意図を浮き彫りにすることで答えようとしている。すなわち、マキァヴェッリが「当時の読者に実際にどのような政治的メッセージを伝えようとしていたか、そのために、読者にどのような新しい政治的理解を提供しようとしていたかを明らかにすること」（一七頁）を本書は目的としている。恣意性をできる限り排除し、マキァヴェッリが生きた時代の政治的争点・論点を浮き彫りにする作業を通じて、マキァヴェッリが共和制的自由を持ったフィレンツェの存続と発展を目指し、その目的のために『君主論』や『リウィウス論』等の著作を執筆したことを、本書は四つの章を通じて検証している。

第一章「自由の伝統」では、マキァヴェッリが愛し、その

中で生きた、「祖国」フィレンツェの歴史が詳細に検討されている。フィレンツェでは数世紀にわたって共和制を維持し、自己決定と参加を重んじる共和主義的自由の理念を市民たちが抱いていた。それがマキァヴェッリの生きた時代におけるフィレンツェの現実であり、長期的コンセンサスだった。その上で、フィレンツェには、共和国の内部における貴族と民衆の対立が十三世紀以来続いていた。この対立の図式は、マキァヴェッリの時代において尖鋭化し、メディチ家や教皇領をめぐり錯綜した現実が存在した。

第二章「『君主論』の意図」では、第一章で示された政治的背景のもとに執筆された『君主論』の理論的・執筆的意図が分析される。著者は、『君主論』のテクストを検討し、マキァヴェッリの主要な関心が「新君主」という限定的対象に向けられていたことを明らかにする。新君主とは、世襲君主とは異なる、いわば権力の簒奪者である。マキァヴェッリの『君主論』は自覚的にこの例外的状況を描写したものであり、したがって、『君主論』は、マキァヴェッリの政治観全般の現れとは言えない。従来、『君主論』と過度に対照的にとらえられてきたマキァヴェッリ以前の「君主の鑑」の伝統は、実際はそれほど非現実的でも理想論に過ぎるものでもなかったこと、および『君主論』自体も決して没倫理を説いているだけではなく、長期的な視点からの徳の勧めと悪徳の戒めを含み、君主と臣民が信頼関係を構築すべきと主張していることを著者は指摘する。つまり、マキァヴェッリは、決して専制君主制を『君主論』で主張していたわけではなく、「市民的体制」を前提にした「市民的君主国」、すなわちフィレンツェの共和制の維持・構築をメディチ家に求めていたことを本章は検証している。

第三章「共和国理論とフィレンツェの自由」で著者は、『リウィウス論』を分析し、マキァヴェッリが求めた共和制の内容を分析している。マキァヴェッリは、『リウィウス論』において共和制ローマの自由維持と勢力拡大の理由を解明し、フィレンツェの模倣対象としての範型を提示しようとした。そのことは、当時においては、単なる古代の思想の復活ではなく、キリスト教的歴史理解への挑戦であった。つまり、政治の失敗を神や運命のせいにせず、人為的要因によって国家の発展や維持を左右できるという主張だった。マキァヴェッリは、古代ローマに範をとりつつ、フィレンツェの現実を強く意識し、『リウィウス論』において拡大型共和国と民主制擁護の議論を展開した。つまり、『リウィウス論』は一部の先行研究が述べるような純理論的な抽象的作品ではなく、極めて実践的な性格を持っていた。そのことが本章では検証され、

さらに先行研究において非現実的な国民国家形成の呼びかけと解釈されてきた『君主論』最終章の「イタリアの解放」の主張が決して非現実的なものではなく、メディチ諸国の連合として十分な現実味を帯びた構想だったことが分析されている。

第四章「祖国フィレンツェの再生」では、マキァヴェッリの晩年の著作である『戦術論』『フィレンツェ政体改革論』『フィレンツェ史』が分析され、『君主論』と『リウィウス論』において一貫しているフィレンツェ共和国の自由の維持と発展という関心が、他の著作においても一貫していることが検証されている。マキァヴェッリはこれらの著作の中で、市民軍と宗教の二つにより共和制を維持発展させることができると考え主張していた。マキァヴェッリにおける宗教とは、キリスト教とは異なる、世俗的価値を肯定し擁護するものであり、いわばキリスト教的な彼岸の救済を放棄するものだった。さらに、マキァヴェッリは、メディチ家に対してフィレンツェの自由の精神を尊重した市民的振る舞いをこれらの著作において要請していた。フィレンツェにおける党派性の克服と市民軍の創設を主張しつつ、実践的には、マキァヴェッリは、イタリア全体ではなく、トスカーナにおけるフィレンツェの覇権の確立を意図していた。これらは、マキァヴェッリが錯綜する現実の中で具体的に達成可能な課題に取り組んでいたことを示している。

「おわりに」において、マキァヴェッリはキリスト教的な救済も、強力な指導者による腐敗の一挙解決も、どちらも断念した上で、なおフィレンツェが、時間はかかるであろうし、幸運も必要ではあるとしても、状況によっては、ローマの理想的市民に接近しうると信じていたことを著者は指摘する。そして、中世のキリスト教が知的安定を人々に与えなくなった時代に、神の摂理とも偶然とも異なる人為を重視する観点から、知的混沌に対して独自の処方箋を提示したことをマキァヴェッリの政治思想の特徴だと著者は指摘している。

長い間ともすれば誤解されがちだった、没倫理の権謀術数家というイメージとは異なるマキァヴェッリ像が本書では提示されている。マキァヴェッリの政治思想は、時代を超えて多くの人に衝撃を与え、インスピレーションの源となってきた。マキアヴェッリの歴史的実像に迫ることは、さらにその助けとなるだろう。マキァヴェッリの背景となる歴史を理解するためにはもちろん、今日的な関心からマキァヴェッリの政治思想に触れようとする人にとっても、本書は重要な導きとなることは間違いないと思われる。

（鎌田厚志）